

白山ふるさと文学賞

第三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生高学年作文の部 最優秀賞

## 私の夢

松任小学校五年

西出にしで

愛菜まな

私の夢は、助産師になることです。

四年生のとき、テレビで助産師の仕事を知ってから、それまでは、看護師になりたかったのですが、助産師に変わりました。

ですが、看護師の資格をとるのがまずむずかしいのに、まだ上の助産師の資格をとるのに、「大丈夫かな」と思う不安もありつつも、「勉強をたくさんがんばろう」と思いました。

なぜ、看護師や助産師になりたかったかというと、人の体がおもしろいということと、人の命を救いたいと思うからです。人の体は、いろいろな働きがあり、いろいろな不思議があります。その働きや、不思議がおもしろいのです。そして、私のおじいちゃんや私は、私の生まれる前から身体障害者で、心ぞうに病気をもっています。身体障害者の中でも、一種の一級で一番上です。いつたおれてもおかしくなく、よく病院に入院していたので、人の命をできるだけ多く、長くしてあげたいなと思ったからなのです。

助産師になるにはどうしたらいいか。

もちろん、学校で習う勉強も必要ですが、医学の知識もいります。ですが私は、赤ちゃんに実際にふれあったり、赤ちゃんを産んだ経験のある方にお話しを聞いたりして、自分で感じる事が大切なんだと思います。

もし、私が助産師になれば、赤ちゃんも、赤ちゃんのお母さんもりラックスできるようなお産のお手伝いがしたいです。

私は、いつもそばにいて、安心できる助産師になりたいです。産婦人科棟には、赤ちゃんのお母さんが知っている人はいないので、すぐくきんちようして、不安だと思えます。だからやさしいけど、すぐにうちとけて、どんな人とも仲良く、不安を安心に変えるような助産師になりたいです。

私が思う一番大変なお仕事は、やっぱりお産だと思います。お母さんも赤ちゃんも、元気でないといけないからです。赤ちゃんが多いのは、

へその緒が首にまきついて、息ができなくなることです。他にも、体重が小さすぎてしまい命を落としてしまうことがあります。しかし、きけんなのは赤ちゃんだけではありません。産むときに、出血多量だったり、お母さんは、何があってもおかしくない状況なのです。今まで赤ちゃんもお母さんも元気であたり前と思っていたので、実はすごくきけんだと知って、びっくりしました。

あらためてお母さんに話を聞いたとき、

「いつ、何があってもおかしくないでしょう。」

と言われて、思えばそうだなと思いました。お母さんや赤ちゃんは、すごくきけんな状況だったのに、よく元気だったなと思いました。私は、いつもお母さんが、赤ちゃんを産んだ人に、

「元気でよかったです。」

と言っているのが、前はまいち分からなかったけど、今なら分かるし「元気で本当によかったです。」

と心から思えます。それがうれしいです。

助産師は、いそがしいです。人数でも、助産師になるのはむずかしいので少ないです。看護師は、助産師を手伝うことはできません。ですが、助産師は看護師を手伝うことができます。

助産師はいそがしくて、赤ちゃんのお母さんたちのサポートもいりますが、食事の管理もします。特に、体はタンパク質でできているので、タンパク質とほねにいいカルシウム、血にいい鉄分などが多く必要となります。アレルギーのある人もいるので、その事も考えなければならぬので、特にバランスが大事なんだなと思いました。

私は、助産師をほこりに思っています。なぜかという、助産師は命をたくされてるからです。産まれてくるのを手伝うことで、命をたくされているのと同時に、新しい命が出るのを手伝っているからです。私は、そんな助産師さんたちにあこがれています。

でも、その思いとはうらはらに、たまに、こわくないのかなと思います

す。小さな命といえど、命はすごく重いです。一度なくなった命はもう二度ともどることはありません。私が子どもだから分らないのかもしれませんが、私が助産師ではないから分らないのかもしれません。私も知らないからかも知れません。でも、自分がと考えると、すごくわくなります。助産師の方は、それを分かっているやっているので、すごいかくごだなどと思います。私もはやく、そのかくごができる日が来るといいなと思います。

私は、ここまで書いてさらに助産師に興味を持ち、なりたいと思いましたが、命に関わることはやっぱりいいなと思いました。命の大切さを実感する中、たくさんの命を背負っているからこそできることだと私は思います。命ははかりにはかけず、一つ一つ平等な命でそれをたくさんの人に知ってほしいです。

